

館報

まつやま

第19号

題字 松山篤書  
平成22年10月14日発行

大正天皇の即位を祝って大正3年3月～7月、東京上野公園で開催。不忍池の畔には日本初のエスカレーターも設置された。右上は、第一回・第二回・第三回内国勸業博覧会が開かれた東京国立博物館の建物。

東京国立博物館



「大正三年 大正博覧会全景図」(松山記念館蔵)

1. 大正三年 大正博覧会全景図 …………… 表紙
2. 内国勸業博覧会と農業の近代化 …………… 2～5
3. <sup>たんざんそうようり</sup>単鑿双用犁の模倣犁…………… 6・7
4. 報告事項…………… 8

財団法人 松山記念館

# 内国勸業博覧会と農業の近代化

められました。

## 〔内国勸業博覧会の開催経過〕

第一回内国勸業博覧会は明治一〇年八月二日から一

月三日まで東京上野の寛永寺本坊跡地で開かれました。煉瓦造りの美術館を中心にして機械館・園芸館・農業館などが設けられ、四五万人を超える入場者を数えました。会場中央には不忍池から蒸気ポンプで水を汲み上げて西洋式噴水がつくられ、臥雲辰致（長野県安曇野市堀金出身）のガラ紡績機の出品が話題をよびました。臥雲式紡績機は、第一回内国勸業博覧会で鳳紋賞を受賞して、これを機にガラ紡績は全国に広まったといわれています。

第二回内国勸業博覧会は明治一四年三月一日から六月三〇日まで東京上野公園で開催。新築になったばかりのコンドル設計の東京国立博物館本館（関東大震災で損壊、現存しない）が利用されました。機械動力では、人力から蒸気力への移行を示す出品がありました。入場者は八二万人。

第三回内国勸業博覧会は明治一八年に開催するはずだった第三回内国勸業博覧会は、神武天皇即位二五五〇年の祝祭に併せて行われることになり、明治二三年三月二六日から七月三十一日まで東京上野公園で開催されました。日本初の電車が、現在の東京文化会館と科学館の間を走りました。入場者は一〇二万人。

第四回は、明治二八年四月一日から七月三十一日まで京都府で行われました。平安遷都千百年祭と同時開催し、東京遷都以降低迷した京都の経済を活性化したいという市民の熱意が結んで開催されました。平安神宮の南に会場が設けられ、日本初の市街電車（市電）が京都七条から平安神宮、伏見・琵琶湖疎水へと敷かれて京都は多くの人出で活気づきました。前年、開催の準備を進めていた中、日清戦争が開戦し、金属工業や機械に係する産業は需用の増加・事業繁忙によって出品が困難となり、鋳業・機械部門の出品数が減少しました。入場者は

予定では明治一八年に開催するはずだった第三回内国勸業博覧会は、神武天皇即位二五五〇年の祝祭に併せて行われることになり、明治二三年三月二六日から七月三十一日まで東京上野公園で開催されました。日本初の電車が、現在の東京文化会館と科学館の間を走りました。入場者は一〇二万人。

第四回は、明治二八年四月一日から七月三十一日まで京都府で行われました。平安遷都千百年祭と同時開催し、東京遷都以降低迷した京都の経済を活性化したいという市民の熱意が結んで開催されました。平安神宮の南に会場が設けられ、日本初の市街電車（市電）が京都七条から平安神宮、伏見・琵琶湖疎水へと敷かれて京都は多くの人出で活気づきました。前年、開催の準備を進めていた中、日清戦争が開戦し、金属工業や機械に係する産業は需用の増加・事業繁忙によって出品が困難となり、鋳業・機械部門の出品数が減少しました。入場者は

予定では明治一八年に開催するはずだった第三回内国勸業博覧会は、神武天皇即位二五五〇年の祝祭に併せて行われることになり、明治二三年三月二六日から七月三十一日まで東京上野公園で開催されました。日本初の電車が、現在の東京文化会館と科学館の間を走りました。入場者は一〇二万人。

一三万人。

第五回は、明治三六年三月一日から七月三十一日まで大阪で開催されました。大阪天王寺を主会場として農業館・林業館・水産館・工業館・台湾館・参考館などが建てられ、第二会場の堺港南砲台跡地に本格的な日本初の水族館が建設されました。参考館は将来の万博を意識して設けられ、それ

まで認められていなかった諸外国、一四カ国にも及ぶ国の製品が展示され、中でもアメリカ製の自動車八台の出品は注目を集めました。初めて夜間開場がされ、各館にイルミネーションがつき、大噴水がライトアップされ、夜は夜景と余興を楽しむ来場者で賑わいました。五ヶ月間に四三三万人が訪れ最先端の技術で開発された新製品や目新しい遊戯具に人々は楽しみ、最後にして最大の博覧会となりました。

莫大な経済効果を得た大阪内国勸業博覧会の成功は、博覧会が都市を活性化させる重要な手段であることを実証

「近代的短床犁の祖」といわれている松山原造の発明した犁は、明治三六年に開催された第五回内国勸業博覧会で有効三等賞を受賞し、表彰状とともに賞牌（メダル）を記念館は収蔵しています。授与されたこの三等賞とはどのような価値を持ったものだったのでしょうか。内国勸業博覧会が農業の近代化に果たした役割をとらえるとともに、賞牌の位置づけを試みました。

## 〔殖産興業政策と博覧会〕

明治政府は、国家の経済を発展させて軍事力の増強を促

す政策をとることによって、欧米列強国に追いつき、国家の保全を目指しました。その中枢を担った大久保利通は、内政を第一とした積極的な近代化政策をすすめ、殖産興業政策に取り組みました。内国勸業博覧会は、殖産興業策の柱と位置づけられて開催されました。博覧会の会場では出品者や入場者が優れた出品物や技術を問近に見、また比較をして技術普及の場となることをねらったのです。第一回は明治一〇年に開催され、以後五年ごとに開かれることが決



第五回内国勸業博覧会絵はがき天神橋は、大川（旧淀川）にかかたて親会場明治31年に大阪で最初にできた博覧会浪花の三大橋のひとつに飾りつけられて意匠化した飾りがつけられています



裏

銅製。表には菊の御紋の周囲に「神武天皇即位紀元二五六三季」と刻まれ、「糸柁と反物」「歯車」「パレット」など十のデザインが、裏面は、正門を中心に会場遠景が刻まれ、賞牌位と「内国勸業博覧会 明治三十六年」と浮き彫りされています。



賞牌 表



有効三等賞牌 賞状

し、次回第六回は万国博覧会開催への期待が高まりました。しかし、第六回は日露戦争後の財政難により延期、ついには中止となり、内国勸業博覧会は第五回が事実上最後の開催となりました。

### 【農業用具の授賞にみる農業の近代化】

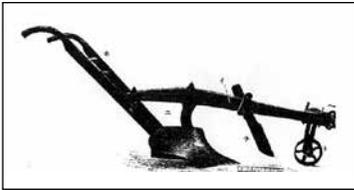
第一回（明治一〇年）では、出品物を府県別に陳列しました。審査報告資料の確認ができず、受賞の詳細は不明ですが、磯野七平（福岡 博多）の犁先はこの時、龍紋賞・鳳紋賞に次ぐ花紋賞を受賞しています。

第二回（明治一四年）からは種別に陳列し、出品者相互の競争心を煽ることを目的としました。第二回の農具の部分の有効一等受賞は、開拓使札幌工業局出品の西洋犁・西洋農具類。次いで有効三等は六人が受賞し、「鉄製農具各種」鍛冶屋村（滋賀）、「茶篩」亀山重蔵（静岡）、「鎌」本山勝太郎（長野 上水内古間）、「稻鋤（稻扱）」船木甚兵衛（島根）、「稻鋤」三島久平・岩木

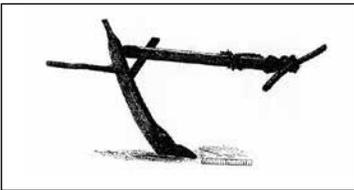
廉蔵（島根）、「西洋犁」井村重春（宮城）でした。井村重春の「西洋犁」は「夙ニ泰西農具ノ便益ナルヲ知り馬耕機械ヲ模造シテ之を地方ニ拡ム、唯製作ノ未タ精巧ナラサルヲ遺憾トス。若シ一層勉勵ヲ加ヘハ不日望ヲ達スルヲ得」と評され、製作が精巧ではなかったが、将来性を見込んで賞されています。

農具では鋏・鎌・篩といつた在来農具の出品が多く、在来農具は製作が精巧で低価格のものが受賞しています。洋式農具では、有効一等賞が開拓使札幌工業局出品の西洋農具類であったことから、泰西農法を導入していた政府が、洋式農具の出品を期待していたことがうかがえます。井村重春の西洋犁の授賞は、洋式農具の製造の発達を勧奨するものでした。

第三回（明治二三年）の農具の部分では、一等賞なしで、二等賞は六人が受賞し、「筋溝鎌」中澤雄波



「西洋犁」深野三之助  
「第三回内国勸業博覧会審査報告」より



「犁」宮原菊太郎  
「第三回内国勸業博覧会報告」より



松山原造が出品した「単鎌双用犁」

（群馬）、「西洋形再鋤犁」深野正之助（北海道）、「桑切包丁」松永兼行（群馬）、「スパード・フォーク・ホーレーキ」徳田直太郎（静岡）、「西洋形犁」井村重春（宮城）、「鋏」上田藤兵衛（島根）、三等賞は四五点で、鎌類一六・稻扱一・二・桑切包丁類四・洋式農具類三・製糸用具二・鋏二・その他四でいずれも製作の質が高く低価格のものが受賞しています。

二等賞の半数は洋式農具で、洋式農具の導入を重視していたことが判ります。犁類の審査報告では、深野正之助（二等）と三浦治郎吉（茨城 三等）の「西洋犁」の図を掲載し、舶来品に比較して廉価で農家が取り入れやすいと述べ、次いで宮原菊太郎（福岡県嘉麻郡熊田村 褒賞 出品の「犁」）（抱持立犁）の図も並べ、福岡犁の有効性を説いています。記述を読みくだいて抜粋すると「古来、中国以南の地方で行われて、いまや廃れようとしている粗造の犁すら未だ全国に普及していない…これは従来福岡県下で使われてきた犁で抱持あるいは持立犁と称するものである。その価値は低廉中の最低廉にもかかわらず効用は普通の犁に劣ることがなく、なお優るところもある。ことに構造は簡単で犁鏡と犁板（犁へら）は同形の铸铁で、犁体は主として杉材で作るものなので、犁鏡二

個（代価およそ一〇錢）を購入すれば容易に自家製できる。但し、初心者は耕起の深浅や畦條の方向を定めるのに少し不便であるが、二〜三週間使用して操作に慣れば、土壌との摩擦が少ないので仕事最迅速だけではなく耕土の深浅を自由にしてお片を左右に転倒させることが自在になる。近年奥羽地方の人が初めてこの犁の利便を知り、使用が盛んになってきた。我が国の従来の犁を圧倒して西洋犁流行の段階になるまでは、この犁があるべきである」と抱持立犁の現段階での必要性を強く述べています。政府は洋式農具の導入をめざしながら、在来農具の有効性を認め、福岡犁に洋式農具流行までの橋渡しとしての役割を期待しました。

第四回（明治二八年）での農業用具の出品は、出品数は増加しましたが「前回に比べて異なることなく、従来の普通品である」と審査報告されています。桑切包丁や稲扱（千歯扱き）・鎌が多数受賞し、耕

うん農具では、有効二等賞に「洋式農具四種」谷七太郎（北海道）、有功三等賞に「農用馬具一組」黒柳喜三郎（北海道）、「犁頭三九種」酒見理平（福岡 三潞郡大川町）、「犁頭六種」磯野七平（福岡 博多）の三人が受賞したにとどまらず、審査員池田謙蔵（元三田農具製作所長）は「これから産業が進歩し労力が騰貴するので、それに備えて農家や農具製造者は農機具の発明や洋式農具模倣の取り組みを広めるべきだ」と指摘しています。

洋式農具は二等の評価を得、抱持立犁の犁先製造者、磯野七平鑄造所は三等を受賞しています。この時、深見鑄造所を経営する深見平次郎（福岡 博多）は三等に次ぐ褒状を受賞し、その授賞理由に「製作精巧ニシテ製額頗ル多シ 以テ其業務ニ勉勵スルヲ見ル」とあります。深見の犁先も品質の信用を得て、かなり普及していたことが判ります。

磯野・深見ともに当時は抱



明治36年3月13日付  
信濃毎日新聞 深見鑄造所広告

造しています。

第五回内国勸業博覧会（明治三六年）の第六類農業用具の審査は、池田謙蔵をはじめとする一六人によって行われました。一等賞はなく、二等賞は二四人が受賞し、その半数以上は鋸・鎌・稲扱（千歯扱き）で、耕うん農具では「洋式犁」柴田勝（北海道）、「大鋸」畑間國松（大阪）の二人です。耕うん農具の三等賞をみると「洋式犁」河端虎吉（北海道）、「洋式犁」佐藤久蔵（北海道）、「大鋸」松川藤市（大阪）、「洋式鋤」大村定吉（静岡）、「単鏡両用犁」松山原造（長野）、「犁頭」磯野七平（福岡）、「犁頭深見平次郎（福岡）」と「鋸」で五人が受賞しています。「審査概況」には「概ね前回と同じであり進歩がない。耕耘・播種器械の発明品で実用に適するものが少ない」と報告されています。いっぽう、「第一部（農業館）審査報告」には、県別に審査の報告がなされています。長野県では、蚕卵紙と薬用人参、神津邦太郎（北佐久郡志

賀村）のバターを高く評価した記述がされています。わずか一頁の長野県の文末に松山原造の犁について次の記載がありました。「小県郡大門村松山原造出品ノ単鏡ニ双用犁ハ洋犁中ノ回転犁ニ模シ鏡ハ全然和犁ニシテ壁ハ鉄板ヲ以テ洋犁ニ疑シタリ実用ニ堪ユヘク且堅牢ナルヘキカ」（実用に耐え、堅牢に違いない）と。

第五回においても洋式犁への授賞が目を見えます。やはり農商務省が洋式農具の導入を重視していた現れです。在来犁の犁先製造業者が受賞を重ねている一方で、短床犁の萌芽期に出現した松山原造の双用犁は、審査官の耳目を集め、新鮮に捉えられました。

【抱持立犁から短床犁へ】

内国勸業博覧会の授賞から、農業用具の近代化移行について見えることは、明治時代の農業行政が①田畑を耕うんする犁の普及に主眼をおいていること②西洋犁の模倣から日本独自の洋式犁の製造がはじまることに期待していたこと③洋式犁が普及するま

で、土壌との摩擦が少なく深耕に適した在来の抱持立犁に信頼を寄せていたこと④無床の抱持立犁に代わる短床犁の開発発注に注目をしはじめたことが判ります。

松山原造は、明治三〇年ごろから郡の農事教師として福岡農法を教えていました。抱持立犁による馬耕を教授するうちに、操作がしやすく作業能率の上がる犁の必要性を実地に感じ、考案試作を重ねて、犁に短い床をつけて操作を安定させ尚かつ犁先はレバーで左右の反転を切り替える装置をもった「**単刃雙用犁**」を明治三年一月に完成させました。考案した**雙用犁**は、原造が崇敬していた長野県立小泉甲種蚕業学校校長の三好米熊博士に「**単刃雙用犁**」と命名

していただき、翌年の明治三四年春に特許出願をし、その年の一二月に特許を取得しました。

内国勸業博覧会への出品願は、明治三五年五月に出されています。第五回内国勸業博覧会への出品は小泉甲種蚕業学校もしていることから、三好米熊博士の勧めもあったのではないかと想像します。明治三六年三月二日付の信濃毎日新聞には、「博覧会彙報」の中で蚕業学校の出品について大きく取り上げています。試験繭や蚕室蚕具の図、桑の苗圃の様子など大掛かりな展示がされたようです。信濃毎日新聞は、第五回内国勸業博覧会が始まると、連日、博覧会のようなすを伝え、とりわけ蚕種・生糸については詳しく

「蚕卵紙は、粹製で沢山整頓されている。見物人は、さすがは本場だ」と誉めていると伝える記事もあります。博覧会の三分の一の面積を占めていたのが工業館で、その主は生糸の出品でした。長野県は生糸の産額が群馬県を凌ぎ、全国一位となっていたので、工業館での出品点数は最多

で、「室中の花」となっていたとようすを伝えていきます。博覧会授与式は七月一日に挙行され、信濃毎日新聞は七月四日に長野県の博覧会受賞者名を公表しています。長野県の受賞は、名誉金牌一、名誉銀杯三、一等賞牌一〇、二等賞牌五九、三等賞牌二二八、褒状三四三で、上位入賞には生糸・繭・蚕種・大麦・寒天・造林の分野が占めていました。松山記念館に「第五回内国勸業博覧会審査報告」や「授賞人名簿」が存在しないこと、日記に受賞の記述がないことから、この時松山原造には農業用具出品者の中でどういった評

価を得たのか伝達されていなかったように思います。福岡の磯野七平鑄造所、深見鑄造所と肩を並べた賞牌が授与され、発明した**雙用犁**が審査官たちに実用に向く新しい犁として評価されたことを知った時は、さぞかし嬉しかったことでしょう。

偶然、大正三年の「松山犁説明書」に表紙の粹飾りとして賞牌を並べてあるのに気づきました。賞牌は第五回内国勸業博覧会の後に勸業博覧会や共進会で拝受したものです。その中央にあるのは、第五回内国勸業博覧会の三等賞牌です。松山原造が、どれほどこの三等賞牌を誇り、大切にしてきたかが解ります。第一回内国勸業博覧会が終

県内外から掲載されています。内国勸業博覧会の褒賞は、出品者奨励のほかにも出品物の信用を増加させ販売促進に役立ちました。

【受賞と製品価値】  
偶然、大正三年の「松山犁説明書」に表紙の粹飾りとして賞牌を並べてあるのに気づきました。賞牌は第五回内国勸業博覧会の後に勸業博覧会や共進会で拝受したものです。その中央にあるのは、第五回内国勸業博覧会の三等賞牌です。松山原造が、どれほどこの三等賞牌を誇り、大切に

#### 参考・引用文献

- 『近代日本と博覧会―明治政府の内国勸業博覧会・万国博覧会・共進会政策―』平成一五年 國雄行 著 文部省科学研究費補助金研究成果報告
- 『日本の鎌・鋏・犁』昭和四四年 大日本農会
- 『第三回内国勸業博覧会審査報告 第三冊第三部』明治二四年 内国勸業博覧会事務局（以下 事務局と表記）
- 『第四回内国勸業博覧会報告』明治三〇年 福岡県内務部
- 『第五回内国勸業博覧会出品審査概況』明治三六年 事務局
- 『第五回内国勸業博覧会審査報告』明治三七年 事務局
- 『第五回内国勸業博覧会報告書』明治三七年 大阪市商工課
- 『第五回内国勸業博覧会受賞名鑑』明治三六年 神戸デイリーニューズ社
- 『信濃毎日新聞アーカイブス』



第五回内国勸業博覧会出品願と出品許可証の綴り



大正三年 松山犁説明書

松山記念館に「第五回内国勸業博覧会審査報告」や「授賞人名簿」が存在しないこと、日記に受賞の記述がないことから、この時松山原造には農業用具出品者の中でどういった評

価を得たのか伝達されていなかったように思います。福岡の磯野七平鑄造所、深見鑄造所と肩を並べた賞牌が授与され、発明した**雙用犁**が審査官たちに実用に向く新しい犁として評価されたことを知った時は、さぞかし嬉しかったことでしょう。

偶然、大正三年の「松山犁説明書」に表紙の粹飾りとして賞牌を並べてあるのに気づきました。賞牌は第五回内国勸業博覧会の後に勸業博覧会や共進会で拝受したものです。その中央にあるのは、第五回内国勸業博覧会の三等賞牌です。松山原造が、どれほどこの三等賞牌を誇り、大切に

# たんざんそうようり 単鏡 双用犁の模倣犁

一昨年、長野県北安曇郡小谷村の骨重店の軒下にくつつかの畜力犁が置かれているのが通りがかりに目に入りました。

店には休みでしたが、車を止めて軒下に並ぶ犁を見ることにしました。松山犁が並ぶ中に一点、ていねいに手仕事で作り上げた素朴な双用犁がありました。よく見ると犁

先は、明治二〇〜三〇年代に福岡の農業教師が全国に馬耕を教え歩いた当時使用された抱持立犁なつかもつたてすきと同じ犁先でした。その双用の犁は、双用の原理をすべて木で作り込んでいて、レバーを動かすと犁先は確かに連動しているようでした。

犁先をはめて完成させた模造品ではないかと推測しました。



犁を保管していた蔵

松山株の創業者松山原造が明治三四年に特許を取って製造した「単鏡双用犁」の双用の原理を作り出して、従前から使用されていた抱持立犁の

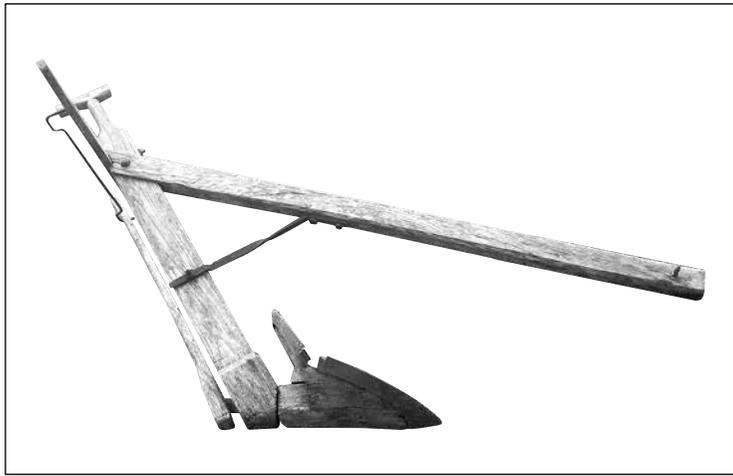
のちに、その年の暮れ、「単鏡双用犁」の比較展示資料として購入をしました。

これだけ、丹念に双用のしくみを木で作り出した双用犁の製作者は一体どういう人だったのか知りたいと思いました。元の所有者と思われる人を訪ね歩いてところ、ようやく辿り着くことができました。

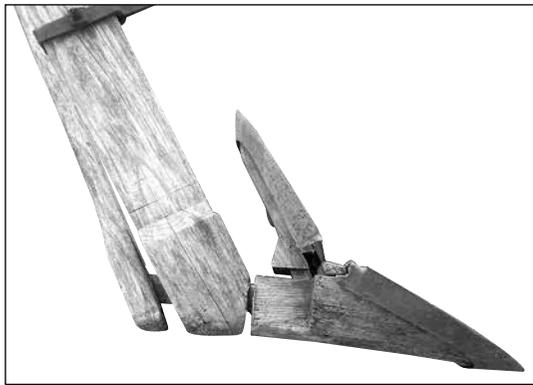
白馬村岩岳山麓に一町五反の田畑を代々受け継いできたという昔からの豊かな暮らしがうかがえる家でした。

家から道を隔てて蔵があり、その蔵の二階に馬具などとともに犁は保管していました。犁は現在の御当主の祖父、松沢金一郎さん（昭和二六年没、享年六一歳）が使用していたものと思われまます。

金一郎さんは、農具の刃先を鞆ふたごを使って直すほど器用な人だったそうです。村に鍛冶職人はいましたが、金一郎さ



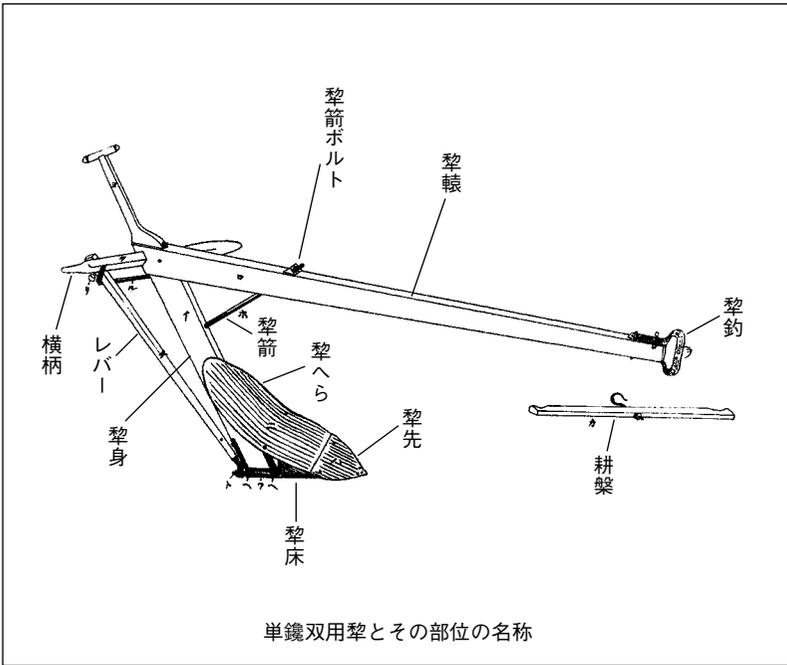
抱持立犁の犁先をもつ模倣犁



犁床 部分

んは轡を家に備えて、ツルハシや万鋸など自分で使う農具の直しをしていたそうです。また、いまも掛けられている柱時計を金一郎さんは、部品をすべて廊下に並べてよく分解掃除していたと語り継がれています。

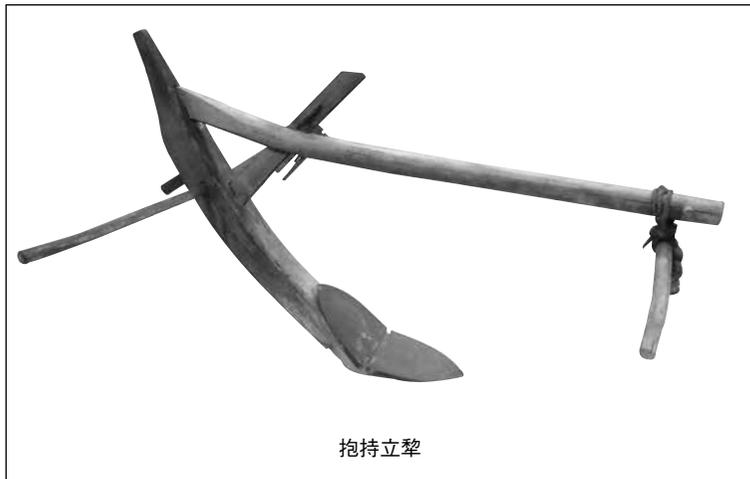
金一郎さんの家では、松山(株)の犁を使ってきたというところから、以前から所持していた抱持立犁の犁先を利用して、松山犁とそっくり同じ構造を持つ犁をもう一挺、自家用に試作したことが推察できます。



単鏡双用犁とその部位の名称

犁を計測すると、犁轆長一五二c m、横柄中七〇c m、犁へら巾二二・五c m、犁床三七c mでした。犁轆長は、明治三〇年代の単鏡双用犁が一四六c m、大正期前半の松山犁が一三八c mで、犁轆長が一二五c mになるのは以降のことです。犁の木質は軟らかく、杉材かと思われれます。この犁で着目したことは、犁箭<sup>りせん</sup>ホルトが四角であることです。四角ホルトは建築金物として使われたもので、数年前、明治三二年に修理された国宝・唐招提寺金堂の柱等に三百個を超える四角ホルトが使われていたことが調査され、「百年前のホルト」ということで話題になりました。松山記念館に展示する創業初期の単鏡双用犁も犁箭ホルトは四角ホルトを使っています。建築金物として流通がはじまった四角ホルトは、畜力犁の構造を支える止めねじとしても使われたようです。その後、六角ホルトが工作機械用ホルトとして使われるよう

になり、松山犁もごく初期のものを除いては、六角ホルトがついています。この犁も創業初期の松山犁を忠実に模して、犁箭を固定するホルトとして四角ホルトを使用しています。「横柄ツル」にも年代的な特長があります。大正八年発行、松山犁製品説明書の部品定価表の図にある横柄のツルは直棒で、レバーの掛け止めがないことから、横柄ツルにレバーの掛け止めが施されるようになったのはそれ以後と思われるようです。以上のことから、この抱え持立犁の犁先をもつ構造双用犁は、四角ホルトを



抱持立犁

もの掛け止めのある横柄ツルの装着使用年代からすると、横柄ツルが後に付け替えられたことも想像できますが、大正期後半以降に完成したことが類推できます。

(学芸員 田中壽子)

## 第十八回文化講演会の開催

平成二十一年九月二十五日松山記念館主催、上田市・上田市教育委員会後援で、松山株式会社三階ホールにて、第十八回文化講演会が開催されました。

講師に、川辺農研産業㈱取締役会長川辺久男氏をお願いし、メリーティ用犁の開発秘話をテーマとして講演された。(聴講者一五九人)



講演会に先立ち主催者を代表して理事長が挨拶のこち、今講演会のご後援を頂いた上田市、上田市教育委員会を代表してご出席頂いた佐藤清

正九子地域自治センター次長様と、ご多忙のなか本日の講演をお引き受け頂いた川辺久男様にお礼を述べ、「先生は戦後によりまして復員後鴻巣の農林省農事試験場の技官として農業機械の技術研究に携わって来られ、その後細王舎に移られメリーティラーの普及にご尽力をされております。

特にそのメリーティラーに輸入ブラウの適応性に限界を感じ、畜力犁の利用を考え、メリーティラーの犁耕を完成させております。さらにその後、独立され(株)川辺農機機械研究所を設立、各種農業機械の開発にご尽力され現在に至っております。このように長年の経験と実績、そしてたゆまぬ努力をもってトレンチャー総合メーカーとして活躍されておられる業界の第一人者であること

はさることながら、長らく先駆者の指導者的役割を果たしてこられた先生の格調高いお話しを伺えると思えますので御静聴ください」と開会の挨拶をしました。

続いて佐藤九子地域自治センター次長より、ご挨拶を頂いた後講演に入りました。

講演は、昭和二十一年七月に農林省農事試験場鴻巣試験地に入り農機具の研究室に配属され、故松山篤会長との馴れそめから入り、故松山篤会長は鴻巣の大先輩、当時松山塾の社長がよく試験場に連れられ、犁についていろいろの教えて貰いました。このわけは、松山さんは何と鴻巣(農機具研究室)の大先輩だったので、つまり先輩が後輩を指導して下さいました。松山社長は大学を卒業して松山塾製作所に入る前に鴻巣の試験場に内地留学されていたんだそうです。ですから「おれはお前達の先輩なんだ」とよく言われまして、長い間ご指導いただいたので、普通の関係ではなく、師弟の関係という感じが心の中にありました。

終戦から昭和二十四年頃まで(戦時中の軍需工場が、仕事が無く鍋釜を作った)時代は、農機具が不足していたので売れるということ、軍需の転換工場が見ずらく、真似ている犁のイミテーションを作っている「見て貰いたい」と試験場に持ち込まれたが、不思議なもので、うまく耕かせない、つまり実用化できないものばかりで、犁の難しく、奥が深く、面白いものだとつくづく感じました。このように、戦後しばらくは畜力利用農機が主流であったが昭和二十五年「朝鮮戦争」

の特需発生で日本の産業経済界に活気を呈し、農機業界も恩恵に浴した。この頃、久保田鉄工所(現クボタ)、井関農機(株)、佐藤造機(現三菱農機)が、新しくロータリー耕うん機の分野に参入し、多数の耕うん機の中には、劣悪な品質のものや耕うん性能が著しく劣るものなども販売され、一部社会問題となり、昭和二十七年に「第一回耕うん機の国営検査」が実施された。この時耕うん機は耕うん方式によってクランク式(二社)、スクリユウ式(一社)、ロータリー式(二)三社が受験し、三百目にあるメーカーが従来ロータリー爪とは全く正反対の考え方をもちったナタ爪をつけて受け、ロータリー軸にワラや稲株のまきつきがほとんどない、よい成績を出した。すると翌日からの試験ではロータリー式は、すべてナタ爪化した事に驚かされた。後で聞いた話、で検査が行われた長岡市内の鍛冶屋さんが徹夜でナタ爪作りをされたことを知り、民間活力に脱帽した次第です。昭和二十八年八月脱穀機メーカーの細王舎からメリーティラーの鑑定依頼があったが、耕うん試験では跳びはねて土に入って行かないし、牽引力試験では2・2馬力/3600回転が車輪の牽引力が、足りないの「農用としての実用性は難しい」と鑑定評価した。しかし構造が簡単でしかも全重量が四十五kg(当時の耕うん機の十分一)という小さな耕うん機に興味をそそられ、販売店の意見を聞いたらどうかとアドバイスした。

その後、販売店の情報もヒントに果樹園や傾斜地で使えることがわかり四十〜五十台から輸入が始まる。

しかしどうしてもニーズの高い水田用のティラーが、必要となり細王舎から「リクルート」され、農林省を退職し、(株)細王舎に入り、ティラー用の和犁、和犁用の水田車輪、水田代掻き車輪、代掻きレーキの試作を完了した。そこで犁メーカーに断られ、用和犁の量産依頼をするが断られ、しかたなく社内でも量産するが受注量をこなすのは大変でした。手掛けて半年ほどたった昭和二十九年十一月農機輸出展で松山篤社長に会「素人は怖いな」と言われながらも生産を依頼することができた。

こうしてティラー用犁の開発を通して、経営者はいつも時代の流れ、変化を的確につかむことがいかに重要であるかを実感しました。と講演を締めました。

### 理事会・評議員会開催

☆平成二十一年十二月九日(水) 協同サービス(株)二階ホールに於いて、第二十二回理事会、第二十四回評議員会が開催され平成二十二年事業計画書(案)、同予算書(案)、及び新公益法人制度施行に対する取組み状況について審議され、出席者全員が承認を得て終了された。  
☆平成二十二年二月十日(水) 協同サービス(株)二階ホールに於いて、第二十三回理事会、第二十五回評議員会が開催され、平成二十一年度事業報告書及び収支計算書並びに財務諸表(貸借対照表、財産目録、正味財産増減計算書、財務諸表の注記、計算書類の付属明細書)の承認の件について審議され、出席者全員が承認を得て終了された。

### 新入社員研修見学



松山株式会社平成二十二年四月新入社員は、四月一日(木)の入社式終了後、当館を訪れ、松山株式会社創業以来の歴史を研修した。

### 平成二十一年度当館見学者

総数 一、四八九名  
(内訳)  
県外(含外国) 七二、八名  
東信 一九、三名  
北信 五、二名  
中信 二、二名  
南信 〇、五名

### 逝去お悔やみ申し上げます

理事 中山忠義氏 22・5・22  
中山氏は、当記念館創設時以来評議員、そして平成十五年一月より理事の役職を努められ記念館運営にご尽力頂きました。  
衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

### 第十九回文化講演会決定

日時：平成二十二年十月十五日(金)  
場所：松山(株)三階ホール  
講師：鋤柄農機株式会社  
取締役専務 鋤柄 勘治氏  
演題：「温故知新」